

オーウェン・ジョーンズ『装飾の文法』を再読する

竹内 有子 (京都先端科学大学)

19世紀英国の建築家・著述家・デザイナー、オーウェン・ジョーンズ(Owen Jones,1809-1874)は、1856年、『装飾の文法 (The grammar of ornament)』を著した。石版の多色印刷による112の差し込み図版を所収した、装飾文様集成である。その内容は、①デザイン原理(37提言)、②各装飾文様の歴史・解説、③各文様の色刷り図版、で構成される。同書は、西欧の古典古代を重視する見方から離れ、19の異なる時代・文化圏を扱いながら、最終章で19世紀の模範とすべく植物をモチーフに採用する新しい装飾文様を提示した。同書は、デザイン教育の刷新を図らんとする官立デザイン学校において、必須の参考書として使用された。

近代運動は、前世紀のデザインの特徴をなす「装飾・歴史様式・折衷」を忌避してきた。ゆえに『装飾の文法』は、モダニズム中心史観では積極的に評価されてこなかったが、今世紀になって見直しが行われつつある。同書に係る先行研究は、次の視点から記述されてきた。一つが、同書からジョーンズのイスラム芸術への傾注と東方芸術の礼賛を抽出するものである。この解釈は、それが帝国意識の表出か否かに関連する議論と結びついて語られてきた。もう一つは、ジョーンズによるデザインのマニフェストともいえるべきデザイン原理(37提言)について、近代的重要性を付すものである。その主張の中でとりわけ、装飾形式の「幾何学性・抽象性・平面性」に新しい意味性を指摘する。最後が、同書のテキストとイメージの関係性を問うものである。ここでは、ジョーンズの提言と(それを例証するはずの)図版との間にみられる齟齬が指摘される。すなわち、前者が反歴史主義を志向するのに対して、後者はテキストから独立して歴史的様式の再生産を促すというわけである。同時に、二次的なものと見なされてきた図版に注目して、イメージの諸効果について検討する論考も散見される。

しかし『装飾の文法』の提言には、形態の原理よりも、色彩のそれに重心が置かれている。ジョーンズの提言が37箇条あるうち、なぜ21もの提言が色彩に割かれ、それ自体にどのような意味があったかという問題について考察した研究はあまりない。ジョーンズは1830年代初期、グランド・ツアーで古代建築のポリクロミー(多色装飾)について調査を行い、色彩および同時代の色彩論への関心を深めてゆく。帰国後彼は、アルハンブラ宮殿の装飾の色彩美を自著で再現すべく、当時の新しい石版印刷術に自ら挑戦する。また1851年の大博覧会では、各国の展示品を実見したほか、色彩調和論を基に水晶宮の内装をデザインした。続いてシデナムの水晶宮では、古代エジプトからアルハ

ンブラ宮殿に渡る4つの芸術展示を担当した。『装飾の文法』は、彼の体験とデザイン活動の集大成であった。本発表は、「色彩」に纏わるジョーンズの経験／理論／実践を総合して、本書のテキストとイメージが持つ意味を再考する。